



9月号

ひだまり

今月のエッセー

十五夜の祈り

残暑厳しい日々が続きますが、季節はもうすでに秋。秋といえは月が綺麗に見える季節です。中でも「十五夜」は特に月が美しく見えます。十五夜は「中秋の名月」とも呼ばれ、「秋の真ん中に出る月」という意味があります。

日本では太古の昔から月を神聖視していたようで、縄文時代にも月を愛でる風習があったと言われています。庶民も広く十五夜を楽しむようになったのは江戸時代に入ってからで、ただ月を眺めるのではなく、収穫祭の意味合いが大きかったようです。

私の実家のお寺では、十五夜の日にお経をあげる習慣があります。縁側にススキと月見団子、枝豆や栗などを供えて月に向かってお経を唱えます。小学校の時は、このお経は月にいるウサギさんに対して拝んでいるのだと、子どもながらにずっと思っていました。

この祈りが豊作を願うことだと気づいたのはずっと後のこと。全国の寺院では、十五夜の日にお経を唱えるということはあまりないようですが、農家の檀家さんが多い私のお寺ならではの風習なのかもしれません。

先日、一日だけ帰省した時に実家周りの田んぼの稲が天に向かって青々と伸びているのを目にしました。災害が多い昨今。収穫のできなかった農作物の話をよく聞きますが、その中でも、実りを蓄え収穫ができるようになった食べ物に手を合わせたいと思います。今年は、九月二十四日が十五夜だそうです。皆さんも月を眺め、食べ物に対して感謝の想いを馳せてみていただけたらと思います。

◆ 深澤亮道

活動紹介

演劇実習 ぼくらのひみつきち

まだ残暑の厳しい九月。私たちは毎年この時期に幼稚園や保育園にお邪魔して演劇を披露する実習をします。様々な活動の合間を縫って、脚本から衣装、照明に至るまで全て自分たちで作ります。今年の劇のタイトルは「ぼくらのひみつきち」。物語の主人公であるモンタくんを菊地さんが、キツツキ役を秦さんが演じました。



劇の様子

この実習のねらいは、劇を通して子どもたちに分かりやすく仏教の教えを伝えることです。今年のテーマは「和合」。乳水和合という言葉もあるよ

うに、自分と他人の違いを認めた上でお互いを尊重し仲良くすることの大切さを表現しました。



劇の後は園児たちとのふれあいの時間です。一緒にご飯を食べたらお昼寝の時間まで一緒に遊びます。劇で役を演じた所員は毎年子供たちの人気者。今年も二人は大勢の子供たちでもみくちゃになりました。

子供たちに劇を通して仏教を伝えるには、私たちがしっかりと教えを噛み砕いてセリフや演技に落とし込む必要があります。私は今年で三回目を迎える最後の年となりましたが、毎年その難しさを痛感します。でもいざ園児たちと触れ合うと、素直でまっすぐな子どもたちの姿に私たちがたくさんのお話を気づかされる。今年もそんな素敵な実習となりました。

◆ 本田真大

編集後記

今年はいかような暑い夏でしたが、みなさんはいかがお過ごしでしたか？

夏の甲子園は百回目を迎え、例年以上に盛り上がりを見せました。手に汗握る熱戦、笑いあり涙ありの校歌斉唱。まさに人生の縮図のようでした。球児がみせる輝きに私は脱帽しました。

好きなことに夢中になれる。その姿は老若男女を問わず人の心を動かします。結果ばかりを求められがちな現代ですが、たとえ結果が伴わなかったとしても、その経験は大きな財産となるでしょう。ある監督は試合後に必ず選手達へ声を掛けます。

「お前たち、最高だぜ！」

勝つても負けても清々しい。本当に最高の夏でした。

◆ 秦慧洲

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

法のお話



二年度
山内弾正やまうちだんじょう

呼ばれる命

「先に呼ばれてちょうだい」
「呼ばれます」

これは京都や大阪、新潟、茨城などの各地で見られる方言で、「先に食べてちょうだい」「いただきます」という意味をあらわしています。「食べる、いただく」という意味で使われるこの方言は、私の実家でもたまに使われています。昔から「変わった言い方だなあ」とは思っていました。が、今までそれについて深く考えたことはありませんでした。

ところが先だって、あるエッセイと出会ったことで、この「呼ばれる」という方言の見方がガラリと変わったのです。そのエッセイの一部をご紹介します。

（「呼ばれる」という方言の）由来を

考えてみた。呼ばれる、つまり何かか呼んでいると考えた。呼んでいるのは何だろうと考えた。考えて、考えて、やっと思いついた。呼んでいるのは、命だと思つた。そして、もう一つ気がついた。呼ばれるのも命だ。つまり、食べるということは、命が命に呼ばれるということだ。

小学校五年生の女の子によって書かれたこのエッセイは、『命が命を呼んでいる』と題されていました。この作品に出会うまで、私は「呼ばれる」という方言に、ましてや「食べる」ということに対して、このように考えたことはありませんでした。それはきっと、私がそれまで「食べる」と「たくさんの命の犠牲の上に自分というひとつの命があるもの」だと、どこか思い込んでいたからなのでしょう。けれども、「食べる」と「自分というひとつの命と、たくさんの命が呼ばれ合つてつながるもの」だと気が付かれた時、私はさらに次の言葉を思い出しました。

功の多少を計り彼の来処を量る

この言葉は、食事をいただく時のお唱えごとで、「五観の偈」という偈文の中の一文です。目の前の食事がどのような出来上がったのかを想い、それぞれの器が調うまでの様々なことに感謝を捧げる意味をあらわしています。

『命が命を呼んでいる』と題されたエッセイには、まさにこの偈文に通ずる意味があらわれているように思うのです。命が「生かすもの／生かされるもの」という区分なく、それぞれが呼応しあいながら、つながっているということ。目の前の食事も、語り尽くせないほど様々な命が呼び合つて、それぞれの器を成立させ、そして今、私というひとつの命とつながっていること。

「呼ばれてちょうだい」「呼ばれます」。実家に帰った時、このやりとりをするたびに私は少女のエッセイから得られた気づきを思い出すでしょう。そして、目の前にある食事のひとつひとつが、私という命とつながり合っていることに改めて感謝の念を込めて、いっそう丁寧に手を合わせたいと思います。

きくちしもん 菊地志門のこぼなし

「今年の秋は」



食欲の秋、スポーツの秋、読書の秋、そして芸術の秋、毎年のようによく耳にします。秋には野菜や果物も多く収穫され、お米も秋にとれます。また、四季の中でも平均気温が二十二度前後で比較的過ごしやすい季節ではないかと思えます。旬のおいしいものをいただき、居心地の良いところへ身を置き、興味のあるものに触れてみる。そのような一人一人の〇〇を味わうのが秋なのでしょう。

私にとつての秋は、さんま。大好きな旬のさんまをいただくことです。昨年は海流の影響や日本の近海にさんまの群が集まらなかったことから、全国の水揚げ量が約半世紀ぶりに低水準でした。今年も心配でしたが、ニュースによると今年の水揚げは順調だそうです。

九月九日に「目黒のさんま祭り」が開催されました。今では、東京の秋の風物詩となっています。有名な落語「目黒のさんま」にちなんだお祭りです。例年約三万人が備長炭でじっくりと焼かれたさんまに舌鼓を打ちます。実は、この「目黒のさんま祭り」は二回あります。九月十六日は、目黒区の友好都市である気仙沼から水揚げされたさんまが振る舞われます。私の地元が気仙沼ということもあり、気仙沼のさんまを食べられるこの日をとっても楽しみにしています。地元では、毎年この時期になると、食卓には脂が乗った、身の大きいさんまが食卓に並びます。大根おろしでさっぱりといただきますが、この目黒のさんま祭りでは、加えてすだちを絞っていただきます。

まもなく一年の四分の三が過ぎようとしています。そして、来年で年号が変わり、今年は何をするにも「平成最後の」という言葉がついて回ります。特別、社会がガラッと変わるわけではありませんが、時代の節目として考えてみるのも良いかも知れません。